

# 闇に淫する詩作の試み

高 野 吾 朗

## ボランティア

夢の中で、あなたはものすごく狭い岩穴に、自分の体を無理やり押し込んでいた。この穴を抜けると、光り輝くこれまでの世界から、どこへたどりつくことになるのか、あなたはぜひとも知りたかったのだ。上半身は何とか通り抜けたが、下半身がどうやっても抜けてくれない。通り抜けた先はどうやら闇の世界であり、何も見えない。身動きが全く取れず、泣き叫びはじめたあなたの耳に、爬虫類のようにずりずりと侵入してくる一つの声があった。「死こそわれらの生命の意味だ。だが、われらは言葉を司る。それこそがわれらの生命の尺度だ」

夢から覚めると、ニュースでボランティアが急遽募集されていた。「闇が崩壊しようとしている」「それを食い止めるためには、あなたの力がぜひ必要だ」とのことだった。さっそくあなたは現地へと向かった。いざ到着してみると、闇はまだ何とか現状を留めたままのようだったが、その崩壊の開始はどうやら時間の問題らしかった。闇のせいで誰の姿も全く見えないものの、あなた以外にも大勢の人々が同じ思いで集まっていることは、周囲の物音で何となく判断することができた。初日は諸注意を聞くだけで終わり、あなたは宿泊先を探した。

手探りで闇の中を進むうちに、あなたの手が誰かの手に触れた。慈愛に満ちた声で「私のところに来ませんか？」と誘われた。相手の顔が全くわからないので、しばらく躊躇していると、同じ声が今度は妖艶に「私のところにぜひ来てほしい」と囁いた。巫女に呼ばれているような気がしながら「はい」と答えるやいなや、あなたの手は斜め上の方向に優しく引かれ始めた。「ここから私のところまでは急な階段を上るばかりなのですが、光がないここでは、何があるかわからない平面を歩くよりも、階段しかない世界を進む方がはるかに安全です」

長い階段を歩き終えると、あなたはいつの間にか館の室内らしき場所にいた。「どうぞ楽になさって下さい」と言われ、手探りで椅子を探して深く腰かけると、巫女らしき館の主の声とは別に、何やら複数のものが右から左、左から右へと雑多にうごめく音がし始めた。「私以外にも宿泊者がいるのですか？」とあなたが問うと、それには答えず、主は何か別のこと始めながら「どうしてこのボランティアに志願を？」と問い合わせてきた。あなたが答えに窮していると、主は続けてこう言った。「あなたもご自身を更生させるためにいらしたの？」

「何も見えない闇の中でこそ誰もが真に平等なのですから、その崩壊は人類にとって害悪でしかないと感じ、私も何かお手伝いできないものかと、ここまでやってくることにしました」と、あなたがせっかく答えたにもかかわらず、それに応える声はもはやなかった。誰かがバーテンダーのごとく、シェイカーらしきものを軽快に振っていた。あなたの前には長いカウンターがあるらしかった。バーテンダーらしき声がした。「山火事の消化のために事前

に炎を使うことがあるそうだが、闇の消失にも似たような方法が使用されたりするのかも」

カウンターでは数名の先客が会話中の様子らしかった。「こんなジョーク、ご存じ？両手両足を失った一人の男が、荒波せまる波打ち際の砂上にぽつんと置かれていてね。可哀相に思った三人の美女が近寄り、一人目が彼に『ハグされたことある？』と尋ねた。彼が『ない』と答えると、彼女がハグしてくれた。二人目が『キスされたことは？』と尋ねた。彼が『ない』と答えると、今度はキスの嵐。最後に三人目が『愛に溺れたことは？』と尋ねた。男が『ない』と答えて涙を流すと、美女が言った。『大丈夫。このままここにいれば溺れるから』」

誰も笑わなかった。すると今度はこんな男の声が聞こえてきた。「この問題、あなたはどう考える？自国が愚かな戦争を起こし、そのせいで敵国にひどく攻撃されてしまい、おかげで体にひどい損傷を負った人間がここにいるとしよう。自国は無残に敗れ去り、敵国に占領され、いまだ壊滅状態のままだ。なんとか生き残ったその人物は、敵だった国の人間のための兵器を作る仕事でいま生活の糧を得ている。その人物の体をかくも傷つけたのは、まさにその兵器だった。この人物の心の中にあるのは悲しみか？怒りか？それとも喜びか？」

誰も答えなかつた。すると今度はこんな女の声が聞こえてきた。「この問題をあなたはどう考えます？ある国で戦争が今日ようやく終わりを告げたとします。そして今ここに、その戦争の辛い日々を、銃を片手に独りで懸命に耐え続けてきた孤児がいるとします。『敵を殺せば殺すほど立派な大人になれる』と昨日まで言い続けていた大人たちが、いま孤児の目の前で『今日からは誰も殺さなくていい！』『人殺しは罪なのだ！』と狂喜しています。するといきなり、その子が大人たちを狙って発砲します。立派な大人になりたいから？それとも？」

「今にも闇が崩れそうだというのに、そんな問題まで考え始めたら、癌のリスクがなおさら上がりますよ」と揶揄する声が、カウンターの向こう側から響いた。それがバーテンダーの声なのか、巫女のごとき館の主の声なのか、あなたにはもはや区別できなかつた。「かまうものか、癌で死んだら人はみな詩になるそうだらね」「死の恐怖から完全に解放されるのは死ぬ瞬間だけだそうですね」などといった声が、笑いとともに上がつた。目の前に何か置かれたようなので、あなたがそれを手探りでつかむと、どうやら氷入りのグラスらしかつた。

闇の奥から多くの足音が近づいてきて、そのままあなたの背後へと通り抜けていった。館の外を勇ましく行進しているようでもあり、それでいて、館の中へぞろぞろと逃げ込んできているようでもあり、見当もつかぬまま、あなたは乾いた喉にちびちびと酒を流し込んだ。館に来る前に受けた「諸注意」のことがぼんやりと思い出されてきた。「ボランティアの皆さんには、ここで私たち地元の人間たちとともに、ぜひ花火になって頂きたいのです。一緒に空へ打ち上がり、一瞬の輝きを放って下されば、闇はなお深まって、さらに安定するのです」

諸注意にはまだ先があった。「闇の崩壊はいきなりやってくるわけではありません。誰にも気づかれぬよう、じわじわやってくるのです。あまりに徐々に来るものだから、微細な変化に我々はすぐ慣れてしまいがちであり、抵抗する機会もないまま、気づいたらもはや手遅れというわけです。闇の破壊者たちはここに『再教育センター』なるものを建築予定のようです。我々は間違いなく強制立ち退きでしょう。破壊者たちには『無知蒙昧なアンダーグラウンド』にしか見えないでしょうが、我々にとってこの闇はまさに『壮大な実験場』なのです」

「ここにいると、なんだか時間の経ち方が変わったように思える」と、少年らしき声がした。「私もそう感じる。ここに来るまでは、時間ってただ先へ先へとまっすぐ伸びていくだけだと思っていたけれど、こここの時間は、まるで無数の小さな点がくねくねと広がっているばかりに思える」と、少女らしき声が応えた。二つの声は混じり合いつつ、闇いっぱいに響き渡った。「その小さな点の一つ一つがとても大事」「このまま永久に生きていけそうな気がする」「独りで何もかも決めなくていいのかも」「この闇の優しさが世界中に伝染すればいいのに」

すっかり酔ったあなたの頭上で、大量の雨粒が屋根のごときものに当たっている様子だった。強烈な風が周囲の固いものに激しくぶつかっているらしく、雷鳴さえ近くで轟いていた。嵐が来たのかという恐怖心よりも、この館がちゃんと闇の中に存在しており、自分は今その室内に守られているのだという再認識の思いの方がはるかに勝り、あなたは思わず嵐に深く感謝した。「そろそろ時間です。皆さん、今日から頑張って働きましょうね」という掛け声とともに、人々が動き出す音がした。「この礼拝堂ともしばしお別れか」と誰かが呟いた。

雷鳴に重なろうとするかのように、一発の銃声が轟いた。あなたには一瞬、闇の中に華々しく打ちあがる花火が見えたような気がした。「何の宗教も信じていないくせに、教会みたいな雰囲気を気取りやがって」「ジョン・レノンにでもなったつもりか」「これが貴様らへの福音だ」と怒鳴る声とともに、誰かがものすごい勢いで走り去っていく足音がした。凍りついたままのあなたの耳に、爬虫類のようにずりずりと侵入してくる一つの声があった。「生命こそわれらの死の意味だ。だが、言葉はわれらを司る。それこそがわれらの死の尺度だ」

## 笑顔の作り方

もしも今 私に「死ぬ権利」が正式に与えられていて  
もしも今 この水の中に致死薬がしっかり入っていて  
もしも今 それを飲むと生まれ変わると言われたら  
私は今すぐこの水を飲み この平凡な町のすぐそばで  
緑の山として生まれ変わり 町を永遠に見守るだろう  
私が隆起する際の震動が 町を滅ぼすかもしれないが

冷房がよく効いた銀行の窓口業務のすぐ横に 今日も  
警備員はじっと立っている どれかの窓口が空くたび  
客がそこへ円滑に流れていく様子 あるいは 用件を  
終えて次々に去る様子を 彼はぼんやりと眺めている  
そして時おり 退屈しのぎの「もしも今」を心の中で  
繰返す すると喉が渴く 冷水入りの水筒は必需品だ

自分の順番が来るのをソファで待っている人々の中に  
中年の婦人と 彼女の娘らしき少女がいる  
婦人は隣の女性たちと世間話に夢中の様子だ  
少女は独り ずっと黙りこくったまま  
膝の上に置いた写真集のページをじっと眺めている

時おり高笑いする婦人の大声が 警備員の耳にも届く  
「夫の失踪で逆に助かりました これからはこの子と  
二人で生きていきます 自称『詩人』なんていう男は  
もう二度と御免です たしかに将来は不安ですけれど  
笑顔をあえて作るようすれば 必ず幸せになれると  
信じていて 『最近は笑顔の作り方を研究中です』」

少女がいま眺めているのは 英国のストーンヘンジの  
写真だ 青空の下 有名なあの巨石群の周囲は無人で  
その前に広がる草原の上を歩むのは 一羽のカモメだ  
その写真のすぐそばに 誰かの文章が掲載されている  
「ここは一つの比喩だ ここを通って世界の内部へと  
潜入り 我々と一つになりたいのなら 魂を整えろ」

娘の脳裏に 去って行った父の声がまた浮かぶ  
「私たちがいるから 君がいるのではない

私たちがいて そしてそれから 君がいるのだ  
ただそれだけだ 私たちが君を選んだのではない  
私たちが君に選ばれたのだ ただそれだけだ」

もしも今 私に「死ぬ権利」が正式に与えられていて  
もしも今 この水の中に致死薬がしっかり入っていて  
もしも今 それを飲むと生まれ変わると言われたら  
私は今すぐこの水を飲み 一輪の薑の花になるだろう  
そして 社会が強制的に消そうと企む 一つの時代の  
記憶のあれこれを 花弁の奥底に しまい込むだろう

警備員のポケットの中には この銀行の正面玄関前で  
今朝たまたま拾った石のかけらが入っている それが  
なぜか 彼には数千年前の土器のかけらに思えるのだ  
昔この場所には 紙幣も硬貨も一切知らぬまま 炎で  
この土器を温めていた人間たちが間違いなくいたのだ  
かん高い婦人の声に 警備員は現実へと引き戻される

「夫の失踪の理由？私にもわかりかねます  
『愛されてばかりの人生は この辺で終わりにしたい  
これからは全てを捨て去る覚悟で 世界の全てを  
愛する人生を送りたい』などと言っておりましたが  
私と娘のことはさほど愛してなかったようです」

少女が次に見つめているのは 死者を呼び出している  
最中の靈媒師の写真だ その横に掲載されている文は  
「歌を歌うための眞の資格は はたして誰にあるのか  
歌詞の魂があなたに丸ごと宿るならいい だが歌詞の  
表面を真似ているだけなら あなたに眞の資格はない  
歌詞の魂が丸ごと宿るような歌い手の人生とは何だ」

「将来が不安と申しましたけれど 実は私には 夫も  
知らなかった預金口座がありましてね 私とこの子の  
一生分のお金がそこにあるのです ただ 困っている  
人々のために そのお金の一部を寄付するつもりです  
善人として一生を終えるのが私の究極の目標なのです  
どの人を選んで助けてあげるか まだ考え中ですが」

娘の脳裏に 去って行った父の声がまた浮かぶ

「私は今まで　自分の詩を美しく飾るための材料として困っている人の物語を使ってきた　でも　これからは困っている人をまず愛し　その声をひたすら聴き　その人を忘れないようにするために　詩を書いていく」

順番がようやく来て　中年婦人は立ち上るが　軽快なその口はまだ止まらない　「この国の将来はおそらく長くないですよ　いずれ隣の国々が　この国の弱さにつけこんで攻めてきます　たくさんの国民が殺されてその一方で　祖国を追われた外国人たちが蠅のようにやってきます　こんな国　私と娘はいずれ捨てます」

少女はいま　夕闇のせまる中で　どこかの国の大河を独り見つめる男の背中の写真に　釘づけになっているこの背中　誰かに似ている　少女の目が掲載文を読む「未来の不確かさに戸惑う暇があるなら　過去を全て忘れたがる自分と戦おう　人間の扱いに二重の基準を設けがちな自分と戦おう　敗北を覚悟の上で戦おう」

ソファの近くに設置されている　テレビのモニターに　ニュース映像が映る　どこかの国で授業料が払えない貧しい女の子が　級友たちの目の前で　みせしめとして教員に鞭で打たれている　その子の顔とソファの少女の顔を　警備員は見比べる

「詩なんて売れないものを書かずに　夫は　たとえば小説でも書くべきでした　多重人格者のような自らのことを物語にすれば少しほはれたのではないかしら」婦人はそう言うと　娘から写真集を奪い取り　彼女の片手を強引に引っ張る　少女の体がぐらりと揺れると警備員の体に　山が新たに隆起するような震動が走る

立ち上がるやいなや　少女が何かを母親の顔に向けて投げる　誰かを鞭で打つかのような腕のしなり具合だ投げた物体が婦人の眉間に直撃する　人々は凍りつき動かない　警備員だけが　床に倒れた婦人に駆け寄る眉間にから血を流しつつも　婦人の顔は　分娩の苦痛に無上の快楽を覚えている妊婦のごとき　満面の笑顔だ

ここから 警備員の視界は色を失っていく  
床に転がっているのは見覚えのある石のかけらだ  
警備員が自分のポケットを探る ない 空っぽだ  
少女の姿もない 警備員の視線がテレビに向かう  
そこに色なく映るのは 荒野を横断する巨大な壁だ

その壁にたった一つ空いている人間ひとり分の隙間に  
一人の少女が自らの片足を踏み入れている その背は  
破れ 血が滲んでいる 「おい 警備員 仕事しろ」  
死者を呼び出すかのごとき怒声で 再び視界が色づく  
平常の窓口風景が再開され 警備員も妄想を再開する  
冷水入りの水筒の隣には あの写真集が置かれている

もしも今 私に「死ぬ権利」が正式に与えられていて  
もしも今 この水の中に致死薬がしっかり入っていて  
もしも今 それを飲むと生まれ変わると言われたら  
私は今すぐこの水を飲み 一羽のカモメになるだろう  
そして 可憐な一輪の葦を嘴にくわえたまま 百の顔  
千の顔がたえず流れる大河の上空を 飛び回るだろう